

---

# 薄桜鬼 ~ 鬼姫と呼ばれる鬼 ~

?ユッキーは魔王様?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薄桜鬼 ～鬼姫と呼ばれる鬼～

### 【Nコード】

N0474Z

### 【作者名】

? ユツキーは魔王様?

### 【あらすじ】

届かない声 わからない自分の存在理由 でも確かに生きている  
記憶がない少女が今ここに!!

## 主人公設定（前書き）

薄桜鬼で新連載

やっちまっ たよ！！

## 主人公設定

主人公設定

名前 紅月こうつき 夜宵やよい

年齢 18

身長 161.2

体重 「言わないよ」

容姿 整った顔立ちで可愛い瞳が深紅色で髪色が銀色みたいな白髪

性格 強そうに見せるタイプだが実は……

好きな色 灰色 水色

詳細 親に捨てられたと勘違いしており、現代で生きてきたが突然トリップし幕末へ行く  
記憶が無い

親の名前

香苗

詳細 夜宵の母親で現代に送った本人

隆哉

詳細 記憶を消した本人夜宵の父親

両名ともに亡くなっています!!

ヒロイン書いてほしいです

## 主人公設定（後書き）

とりあえず終わり

第0夜〜プロローグ〜(前書き)

現代です!!

## 第0夜〜プロローグ

「ハアハア……ハア……ハア」

またこの夢」

私には記憶がない

なのに何故？

古く大きい建物と言うより城と言った方がいい建造物

だがそれは

古く

現代にはあまり見かけない建物

その奥には私が居てふすまから見える外の風景を眺めてる

その風景も現代とはかけ離れている

まさにその時代は

江戸や幕末といった方が いい 景色

そこにはもう一人 女の人 がいる

その女の人 に向かって

『お母様』と呼んでいる

そこから 場面が 変わって

私のまわりは

赤

紅

赤

紅

ア  
カ

ア  
カ

炎の赤

赤ばっか



血  
の  
紅

ネ  
コ  
ノ

それとも一つ

色と瞳の色の人についてるアカ  
.....私と同じ髪

それから

黒い闇が広がる

いつもそこで途切れ起きる夢

でも

リアル過ぎて

怖い

黒い

真っ黒い闇に取り込まれそうで怖い

怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖い怖い

「夜宵〜ご飯〜」

『っ！！！ハイ今いく』

今の声は私の義母さん

あの雨交じりの雪が降っている日は私は義母さんに拾われた

いつも通りの学校

でもその日は

いつもと違っていた

「紅月さん？」

『そうですね』

私が一人帰っていると声をかけられた

振り返ると

キレイな女の人

「これを夜宵様に」

そういつて差し出されたものは

『刀？』

そもそも様？つておかしい

「その刀はあなたが本来持つべき刀

――――月光華げっこうか」

『月光華げっこうか？』

「あの子たちを助けてください

我等の姫であり宝の鬼姫様」

『えっ何言ってる?』

私が目にしたのはきれいな

狂い咲きの

桜

突然上がる突風

振り返るとさっきの女はいなくなっていた

桜の花びらが1枚1枚散っていく

すると何故か眠くなっていった

そして私の意識は

闇に落ちてった・・・

第0夜〜プロローグ〜（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想欲しいです!!!!!!!!!!!!!!

## 第1夜〜出会い〜

「……つウ……!」はっ」

まだ朦朧とする意識……

そして

手元には……

さっきの人が持っていた……

『ゲッコウカ  
月光華』という刀

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

「ッ!」



私は走った

そして見たものは

あの夢と

私と同じ瞳と髪色の

助けよう

女の子

男の服装をした

その奥には

化粧物

そう思い私は

刀に手をかけた

「大丈夫？」

「えっ・・・・・・・・あぁ ハイ!!!!!!」

「そうなら少しじっとしててね」

「えっでも」

「いいから」

そして私は

ザシュ

『月光華』を振るった

終わった

そう思った

だけど・・・

「ッ！……！」

こいつも私と同じ

なのに

こいつと私との違い

それは

血に狂ってる

か

狂ってないか

このままじゃこちらがやられる

だから！！

心臓を

斬る！！

血泣きが舞う

それを浴びる私は

残酷な生き物

突然私は人の気配を感じた

「誰？」

「ああ〜バレちゃった」

「総司ふざけてないで」

「はあ分かってるよ」

「君は五月蠅いなあ〜」

「何する気？」

私は聞いた

「何って?? 斬るんだよ」

キンッ

「なぜ切られなきゃいけない?」

「『アレ』みたでしょ?」

「だからなんだ?」

「フーン気が強いね」

「はあ」

私はボソツとメンドとため息交じりに吐いた

そして聞こえたのは違う人物の声

「そこまでだ」

「今度は誰？」

背後に見える雪

そしてさっきの女の子の前に刀を向ける男の影

私はとっさに

「何してるんだ

その刀をしまえ！」

ドサッ

彼女は気絶し倒れた

カチャン

「安心しろ最初から斬るつもりはねえ」

「「「!!!!!?」」」

私は急に眠気が来て

倒れた

（沖田SIDE）

僕は彼女を見たとき息をのんだ

髪色などが『羅刹』に似ていたから

でも彼女のことをきれいだと思った

「誰？」

突然聞こえた声に僕は我に返った

土方さんが

「安心しろ最初から斬るつもりはねえ」

といった瞬間

僕の方に倒れてきた

柔らかい肌

綺麗だと又思った

この時から僕は『恋』に落ちたのかもしれない

〈SIDE OUT〉

〈SIDE 斉藤〉

綺麗だ

そう思った

刀を振るう姿がまるで

蝶てふのような

そして髪色も何もかも

『羅刹』と同じなのにきれいだと

＼SIDE OUT＼

＼SIDE 千鶴＼

助けてくれた女の方は

とてもきれいな女の人でした

1つ1つの動きが華麗な動き

そして凜としている声

月明かりを浴びている髪色が銀に光り

綺麗だと思った

〈SIDE OUT〉

〈SIDE 土方〉

最初は可哀想だと思った

だが次の瞬間

綺麗な女

と思った

俺が

「安心しろ最初から斬るつもりはねえ」

といった瞬間倒れたのはびっくりした

が

沖田が支えたので安心した

が

この気持ちはなんだ？

}\nSIDE\nOUT\n}

第1夜〜出会い〜(後書き)

いちおー

終わり

## 第2夜〜自己紹介〜

『…………ツ…………うん…………此処は？』

私が目を覚ますと手は縛られ足も縛られている私と女の子

昨日の出来事を思い出し

私は目の前で寝ている女の子を起こそうと思いをかけた

『ねえ起きなさい』

すると数秒後

「……………」

という声をあげて起きた

私は名前を聞こうと声をかけようとしたとき

スウウ

という襖の開く音が聞こえた

次の瞬間声をかけられた

「目が覚めたかい??」

と聞かれた

私は警戒しながら

『アンタ誰?』

と聞いた

「私かい? 私の名前は井上源三郎だよ  
此処は新選組の屯所だよ」

此処が新選組の屯所

そうかだったら私は

トリップしてしまったんだ

『そう』

と私は言った

そして

井上という男は

「ちょっと来てくれるかい？」

と聞いてきた

『まあ……ハイ』

と答えた

「君は如何かい？」

と女の子に聞いた

「えっ……はい」

と彼女も答えた

そして私たちは廊下を出た  
床を歩く

井上さんが幹部の名前を出す  
彼女は納得いかないようだしなにしろ恐怖で怯えていた

部屋の前についた

「近藤さんつれてきたよ」

と  
いった

「失礼します」

『失礼』

私はあんまり声を出さなかった

すると昨日の男が

「おはよう昨日はよく眠れた？」

「あなたは……」

「………みたいだね 畳の跡がついてるよ」

見かねた私は助け舟を出した

『「いつは来てない来てたら心配でわかる』』

と書いてやった

「そつだコイツは一回も行ってない」

と言った

別にどつでもよかった

だがさも気にしなさそつに

「あつバレちゃった」

なごつ

むかつくやつだなあ

ていつか早くしてほしい

と願った

「で、そいつらが目撃者？ちっちゃいし細っこいなあ…まだガキじやん」  
とチビが言った

『テメエに言われたくねえよバカっぽい顔してる奴に』

「言われたもんだな平助」

「でもよそっちのねえちゃんは気が強いな」

なごじ……………

チビと露出男・バンダナヤローが口論してると

「よさんか3人とも!」

と怒られていた

私はどうでもいいから

な思っている

「俺は新選組局長の近藤勇だ」

私はやっぱしと思った

「こちらの山南君が総長でその隣にいるトシ…いや、土方君が副長を務めて…」

「…近藤さん何でいろいろ教えてやってんだよ」

「そうか…」

漫才ですか？

どうでもいいけど

「口さがない者ばかりですみませんねえ」

『テメエが一番やべえ雰囲気してんのにそんな事言うんだ』

「おやおや初対面なのに失礼な方だ」

『別に私は素直な意見を言ったまで』

「もういいだろ斉藤昨日のこと聞かせてもえらおつか」

と土方という男が聞いた



第2夜〜自己紹介〜（後書き）

う〜ん終わり？

### 第3夜〜千鶴のお話〜

「昨夜、京市中を巡回中に隊士たちが不定浪士らと遭遇。斬りあいになった後、浪士らを斬り伏せましたが、その折「失敗」した様子を目撃されています」

別にどうでもいい

私が死のうが悲しむ人はこの世界にはイナイ

「私たちはなんも見ません!!」

『ハア 別に私はどうでもいいですけど』

「でもよおお前が『アレ』斬ったんだろ？」

と私を見て言うチビ

『そうだけど』

「なっ私誰にも言いませんだからッ!！」

「でもよお」

「私まだ・・・」

「???何があつたんだい?話してみて御覧」

「私の名前は雪村 千鶴といます。私の父は蘭方医でした蝶に行くことになり文は毎日届いておりました。だけど突然文が来なくなつたのですそれで京へきたんです」

ふうん

だから何？

私は別に関係ないでしょう

「そうだったのか・・・さしてその人の名は何というのだ？」

近藤っさんて情深い人だなあ

「雪村 綱道と言います」

「なんだとっ！！お前どこまで知っている？」

フウン

なんかワケありね

「えっ!???」

「トシ彼が驚いているだろう!」

えっ

もしかして気づいてない

『ねえ彼女 千鶴さんは女の子』

.....

えっと

筋肉君とチビと近藤さんが

「ええっ!!!!!」

「そんな」

「近藤勇一生の不覚まさか君が女子だったとは……………」

『気づいてなかったんですか』

で

話は進み

千鶴さんは保護決定つと

「さて次はお前だ」

『私も話すの？』

「話せよ」

土方ウザイ

『私の名前は紅月 夜宵』

「それだけか？」

『別に私が言った事を話しても信じるワケないし死んでもいいし』

「主……主……我が主」

『えっ！……？……？……！』

「???どうしたんだ？」

『いやなんでもない』

「むっ

それより

そうか信じるから話を聞こつ

『へえそれホント？』

「ああなあ皆？」

「うん／ああ」

『そうだったら話すよ私が知ってるすべてを』

そして私は語る

不思議な語り物を  
そして主を探す刀

『月光華』

それは刀なのか？

この堺に私が来たときにはもう

物語の歯車は狂ってしまっているのだから・・・

第3夜〜千鶴のお話〜（後書き）

えっとセリフが違う所があると思いますが大目に見てくんしゃい

『何故仁王口調？？』

テニプリが好きな夜宵でした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0474z/>

---

薄桜鬼 ~ 鬼姫と呼ばれる鬼 ~

2011年12月10日19時45分発行